



平素は、弊社商品にお取り組み頂き、
まことに、ありがとうございます。
月間通信 7月号をお送り致しました。
何卒、よろしくお願い致します。



四国高知県の西、大月町まで行きたかったが手前の幡多郡三原村、ほぼ宿毛市に抜けるところだが、そこまで行って、東にターンして津野町まで戻って画像の四国カルスト台地天狗高原迄昇って来た。

北海道の大橋社長は『血圧談義』を送ってくれようとしているらしいが、未だ届かない。届かないが概ね分かっている。内容はおそらく年齢マイナス 90 程度が適値だということだろう。以前二人で話した事を記憶している。その頃は、150~160 程度で安定していて、年齢からして ドンピシャッ だったこと。ところが、160 で安定となるといいのだが、そうは問屋が卸さないという言葉のように、次第に不安定になって、ジリジリどころかイッキに上がる事が発生する。40 程度は瞬間的に軽く上昇する事が体験で分かった。

そうすると、200 はリスクが高い値となる。つまり肝心な事はリスクの無い暮らし振りをしているかどうかで、現役で仕事をこの年齢までしていると、瞬間的なリスクはいくらでも高まる。

では、しつこいようだがリスクを回避する暮らしぶりとはどういう事か。世間的に言う減塩なのか、確かに石垣の塩ポテトチップスが美味しいそうだと食べると、30、40 は瞬間で上がった。砂糖は電気を通さないからと抜いた暮らしは長く経験があるが、塩を抜いた暮らしはした事が無いから何とも言えない。でも想像するに、如何にも味気ない暮らしになるだろう。血圧上昇に繋がるような食事を意図的に避けて、降圧剤をそれなりの量を服用していると、110 台の数値が出ることもあり 120 台となると『しばしば』となる。英語では often。この年齢でこんな低い数値では、日の出とともに起き、日の入りと共に床に就くような、隠遁生活でもするのかわって、感じに支配される暮らしぶりになる。ひよっとすると、『生涯現役でいたい』なんて思わずに、仕事もソコソコに隠遁した方が良いのかも知れない。そう思い、ひとには勧めても自分は勘弁してくれと言うだろう。

一時は 120 台なんて数値が出ると、安心より嬉しかったりしたが、最近は 150 台とかになる方が喜んで自分気づいたりする。つまり、これこそ未だ死なずに済むという気分。別に薬物によって歪められている自分に異を唱える事はしない。こうしてパソコンを使って生産性を上げる事を良しとするなら、薬物を服用して生産性を上げて似たようなものである。もちろん隠遁の仕方も知っているし、そう出来る場所も道具も玩具も既に準備出来ている。だけど自分にとっては死んだような気がしてしまう。人の役にも立ちたいし、自分もその事を楽しみたい。無理しても、しなくても、もうすぐそこまで来ている。時に身を任せるようになって久しいが、その方が得るものが多いような気がしている。欲しがれば欲しがらるほど、欲しいものは遠ざかり、時に委ねていると、ある意味すべてが手に入る。母が言った『世界は貴方のものになる』は正しいのかもしれない。

小豆島の自然の中にいるとはいえ、瀬戸内海ですぐそこは徳島・淡路島である。この画像の連なり重なる山の向こうは太平洋らしい。スケールが違う。会社の仕入先に『満天畑』というグループがこの津野町にいる。会社そのものは『株式会社 満天の星』と言う。廃校になった小学校の校舎を、町が町の為の事業をする者に設備投資をして貸し出すという募集に応募して、企画が通って事業展開をしている企業。その通り、地域の農業・農産物の出荷先のひとつとして、意味と意義を感じて話しに乗った。付き合いが始まった頃一度訪ねたことがあり、その時に近くの新四万十川源流点(いくつかあるが)に案内してもらった。クラウンのロイヤルサルーンだったか、後部座席が快適だったが、『これ以上車では無理』というところまで行って、川辺に降りてしばらく憩っていた。その時に、『此处から更に上に星が綺麗なところがある』と聞いた。多分社名・グループ名の満天はそこから来ているのだろうと思う。一度行ってみたいと思っていたが、今回の旅の計画を組む時には不覚にもその事を忘れていた。だから、画像は17:01にシャッターを押しているが、此处から1時間ほど更に東に戻ったところの宿まで走らなければならなくて、星が出てくるまでは待てなかった。宿に着いて、床に就こうとした時、思い出して星を見ようと、外に出てみた。それなりに出ている。だけど本当はもっと見えて燃るべきだと思うのだが、ボンヤリしか見えない。

そうだ、眼鏡を新調しよう。『天の川』が見たい。二十歳過ぎの頃、東京の石神井から伊豆の須合という山奥まで、ヒッチハイクで飛ばして、夜遅く目的の家の横を流れる川沿いの道まで、送ってくれた最後のドライバーに礼を言ってドアを閉め、そのまま見上げた空の素晴らしかったことは、忘れようがない。降るような星、手を伸ばせば届くような星、どんな星の形容も受け入れて、尚キラメクあの星をばらまいた空は、一生の宝ものとして残っている。衝撃だった。世俗のすべてがどうでも良くなり、次の日の午前中薪を拾いに山に入った時、樹は伐っていいものかどうかを盗られ、結局午前中結論が出ないまま、枯れ枝をロープに縛り背負って山を下りた。

そんな浮世離の頭のまま、囲炉裏に薪を焚べる。料理して食べた後も尚炎を見ていた。見ていると、更に見入ってしまうのが火である。ひとはどんな時に哲学者になれるのだろう。じっと見ていると、薪と炎の間には揺らめく透明な層がある。薪が燃えて炎になっているのじゃない。薪が出すガスが燃えて炎になっている。固体が気体になることを学校で習ったが、実感がわかなかった。液体が気体に換わる気化も、液体が固体に換わる固化も分かり易かった。勿論その逆も。液体の状態を挟むと目に見えるようだが、液体を挟まず固体と気体が行き来するのは、実感が無いから『ああ、そうなんだろうな』と納得させるしかなかった。だけど、遂にその変化が目の前にやって来た。問題は熱だった。

植えて4年目と思うが、桔梗が一輪昨日開いた。今年は手製の柵を作っているからか、柵の外の株も倒れずに集団で支え合っている。最初に咲いた一輪は南側の太陽に一番近いやつだった。『太陽はえらいなあ』と言う。薪が燃えるのではない。熱が薪を気化させて、そのガスが燃える事で、更に他の薪も気化する。組織ってのは、こういう仕組みを言うのかと思った。50年も前の事だ。薪が気化して炎となり、そこに残るものは白い灰である。残った白い灰が美しく見えるのは、最近である。あの時に、『そうか、最後はみんな灰と成るのか』『すべては、同じなんだ』『樹も必要なら伐ればいい』『自分も灰となる覚悟をすれば』と思い至ったのは、ほんの入り口に過ぎなかった。

自分も灰になることを実感すると、それは出口に過ぎない事を同時に感じる。まことひとつの部屋に入って来て、過ごして亦出て行く。宇宙にひとつポカンと浮かぶ部屋に入って出口を見つけると、実はこの部屋は入り口と出口の扉だけがあり、壁も床も天井も無い事に気づく。そんなものはあると思っているだけで、無い物を見ようとしたって御苦労さんでしかない。星は夜しか出ていないのではない。昼もそこにいる。だからと言って、夜に空を見上げていても良いが、昼はやめた方が良い。能天気って思われるだけだから。